

# 明治時代におけるわが国の近代的精神医療の萌芽と挫折に関する歴史的考察

— 精神病院設立経緯と精神障害者看護に焦点を当てて —

呉大学看護学部  
佐々木 秀 美

**論文要旨** 本論はわが国明治期初期の精神衛生行政に影響を与えた人物に焦点をあてて歴史的に検証し、わが国における精神障害者看護について論述したものである。

神仏に頼っていたわが国の精神病患者への対応は明治維新以降、西洋思想の導入に従い、大きく変化した。欧米におけるドロティア・リンド・ディックスの精神障害者に対する改革は為政者森有礼を介してわが国にも及んだ。精神病院が設立されるに従い、座敷牢から精神病院への収容へと大きく変化した。精神障害者が精神病院へ収容されるに従い、看護者の質の問題が問われ、看護婦養成が行われるようになった。呉秀三が実施した『精神病患者私宅監置の状況及びその統計的観察』は“精神病院法”の根拠になった。精神病院の改革は精神障害者の人権の問題が根底にある。時代の流れの中で今日、精神障害者の社会復帰の促進とその自立が提唱され、更に自立と社会活動ができるように支援することが必要になる。

**キーワード**：近代的精神医療、精神病院設立経緯、精神障害者看護、精神障害者の人権、

## ■ 緒 言

本論は明治期初期に導入された西洋医学思想に基づく精神障害者の取り扱いを歴史的に検証し、精神障害者の人権と援助の在り方について示唆を得る目的で行う。

人の精神に関わろうとする者は環境と心、心と体、体と環境との関係を十分に理解する必要がある。『わが国の精神科医療の歴史をめぐって』という紙上座談会<sup>1)</sup>において東京都立松沢病院長の松下正明は、世界三大精神科アブ्यूズ（Abuse；虐待）の一つに日本の精神障害者の処遇があると述べている。医療における精神障害者の処遇の問題は、精神衛生行政の問題であり、それは看護にも大きく影響を与える問題でもある。看護が人々の健康に関わる職業であろうとするととき精神の問題を避けては語れない。その意味で精神科医療の歴史は看護がいかにあるべきかを示唆すると考え

られる。

わが国では古くから狂人に対しては座敷牢が一般的であった。収容施設としては岩倉大雲寺（京都）、光明山順因寺（愛知県）、浄見寺爽神堂（大阪府）、武田癡狂院（広島県）など8ヶ所が存在したとされる。これらの施設は多くが神仏に頼る方法で治療を行っていた。明治維新以降、西洋思想に基づく教育が推進され、わが国固有の文化が変革を求められる中、1900年（明治33年）“精神病患者監護法”が制定され、“精神病院法”によって精神病院の設立が各都道府県に義務づけられた。精神病院の設立によって、必然的に入院をした患者の看護が必要となる。しかしながら、わが国の看護はこの頃、一般的に未熟な時代であった。戦後の1950年（昭和25年）から1987年（昭和62年）には“精神衛生法”が制定された。この法律以後、精神医学が進歩し、精神を患った人々に対する人権意識が高まった。1987年（昭和62年）には“精

神衛生法”が“精神保健法”に改正され、翌1988年（昭和63年）交付された。この法律も1995年（平成7年）には“精神保健及び精神障害者福祉に関する法律”に改正された。これら法律の変遷過程もわが国における精神障害者の取り扱いに関する変化を歴史的に見ることができ、精神障害者に対する取り扱いの変化のなかで、看護にも変革が求められたと考えられる。

一方、アメリカで精神障害者の取り扱いに対して社会改革のメスをいれたのはドロティア・リンド・ディックス<sup>2)</sup>である。ドロティア・リンド・ディックスが行った精神障害者の取り扱いに関する改革はわが国にも及び、森有礼<sup>3)</sup>をして精神病院設立に至らしめた。その後導入された精神医学の創設はそれまでの精神障害者の取り扱いに大きく影響を与えた。呉秀三<sup>4)</sup>が調査報告した『精神病者私宅監置ノ實況及び其統計的觀察』<sup>5)</sup>はわが国の精神障害者の取り扱いに影響を与え、精神障害者に対する取り扱いは私宅から精神病院へと大きく変化したのである。精神障害者の精神病院への収容は必然的に世話をする者が必要となる。それはわが国における精神障害者看護の始まりとも言える。そこで本論ではわが国明治期初期の精神衛生行政に影響を与えた人物に焦点をあてて検証し、わが国における精神障害者看護について論述する。

## ■ わが国における精神病者取り扱いに関する改革運動

内村鑑三<sup>6)</sup>はその自伝的著作『余は如何にして基督信徒となりし乎』<sup>7)</sup>の中で、ドロティア・リンド・ディックスについて述べ、彼女に対する注釈として、森有礼を動かし、日本で始めて白痴院を設立せしめた女性として紹介している。白痴とは一般的に重度精神薄弱児（mentally retarded child）のことを言い、重度精神遅滞児とも呼ばれる。文部大臣として明治中期に学校教育政策に深く関与した森有礼が設立したという白痴院とは一体どこなのか。それが事実なら、わが国における精神障害者取り扱いに関する改革は森有礼によって始められたと言っても過言ではない。

森有礼は1847年（弘化4年）、薩摩の国鹿児島城下（現在の鹿児島市春日町）に藩士森有恕の五男として生まれた。1858年（安政5年）12歳のとき藩校造士館に入学する。1861年（文久元年）15歳のとき藩英学者上野景範<sup>8)</sup>の塾に入り英学を学

んだ。1864年（元治元年）18歳のとき藩英学校開成所に入学し、英学専修生となる。1865年（慶応2年）、薩摩藩では将来の人材育成を計る目的で留学生の派遣が計画された。その人選の際、18歳の森有礼が推挙され、薩摩藩の留学生として西欧の文化技術、海軍測量術研究の為にイギリスに渡った。しかし、森有礼は国の基礎となる学問を学ぶ事の必要性を考え、法律学を学んだ。その後、アメリカに渡り、キリスト教に触れた。明治維新の報告をアメリカで受け1868年（慶応4年）に帰国した。1870年（明治3年）少弁務使に任ぜられ、アメリカへ在勤務が命ぜられた。1871年（明治4年）ワシントンに赴き、公務の傍らスペンサー<sup>9)</sup>やミル<sup>10)</sup>などの学説を研究した。同時にコネチカット、マサチューセッツなど各州の学校を見学し学者・政治家との交友を結んだ。又、密航でアメリカに渡った新島襄<sup>11)</sup>の留学生公認に尽力した。1872年（明治5年）には中弁務使に任ぜられ、その後、代理公使に任ぜられた。同年、森有礼はアメリカで岩倉使節団を出迎え、使節団のアメリカ大統領謁見式に参列した。1873年（明治6年）アメリカより帰国、外務大臣に任ぜられた。1873年（明治6年）明六社<sup>12)</sup>を結成した。明六社の社員には西村茂樹<sup>13)</sup>、西周<sup>14)</sup>、中村正直<sup>15)</sup>、加藤弘之<sup>16)</sup>、福沢諭吉<sup>17)</sup>、箕作秋坪<sup>18)</sup>、箕作麟祥<sup>19)</sup>など当時の教育及び教育政策に深く関わった人物がいた。特に箕作秋坪、箕作麟祥兩名は呉秀三に関係する人物である。彼らは機関紙『明六雑誌』<sup>20)</sup>を発刊して啓蒙運動を行った。また森有礼は私財により1874年（明治7年）には商法講習所（現在の一橋大学）を設立したことで知られる。1878年（明治12年）イギリス公使として渡英し1884年（明治17年）帰国した。1885年（明治18年）第一次伊藤内閣の時に初代文部大臣となり、“学校令”を發布するなど学校制度の改正を行った。1887年（明治20年）、伊勢に赴いた際の参拝の仕方、いわゆる“不敬事件”を引き起こした（この事件は明確に証明されているわけでもなさそうである）森有礼は、1889（明治22年）明治憲法発布式典の日に刺殺された。わが国の教育政策上、あるいは外交上多くの業績を残したと証言するその生涯や思想史<sup>21)22)23)24)</sup>、あるいは彼の生涯について特に詳しく述べられている『森有礼全集』<sup>25)</sup>にも白痴院設立の事実は記述されておらず、機関紙『明六雑誌』<sup>26)</sup>の寄稿文もその多くは妻妾論であり、白痴院設立に関する論文はない。

浦野シマ<sup>27)</sup>の『ドロティア・ディックスと近代日本の精神病院の淵源』<sup>28)</sup>によれば精神障害者の人道的な治療法を世界に広げたいと思っていたドロティア・リンド・ディックスは、日本から代理公使として森有礼が渡米したことを知ったと記述されている。彼女は森有礼と知り合いになることを求めて積極的にアプローチし、熱心な会談を行った。浦野シマは調査の段階で『Life of Dorothea Lynde Dix』を発見し、その著作の最後の章(The Last of Earth)に森有礼の手紙が挿入され、両者の出会いについて記述されていたと述べている。森有礼が代理公使になったのは1872年(明治5年)のことであるから、ドロティア・リンド・ディックスの森有礼へのアプローチはこの頃であろう。

森有礼がドロティア・リンド・ディックスに宛てた手紙には「御身が深き心に居ます事業に関して、なほざりにせしと思召すこと勿れ、私事、其後多くの時日と注意とを、此問題に注ぎ、終に京都にて、一つの癲癇病院を首尾よく設立いたし、今また東京にて、更に一つ、設立中に有之、遠からず、此の善事の為に、開かるべしと存じ候、此外、尚追て設立可レ致、願わくは、多くの不幸者を、せめて少しにても、減ずるの便りとならんことをと、熱望いたし居り候。」<sup>29)</sup>と書かれている。以上の手紙の内容からはドロティア・リンド・ディックスが森有礼に対し、日本における精神病者の人道的な取り扱いに対する何らかの約束を取り付け、森有礼が彼女との約束を果たしつつあることの報告がなされたと考えられる。約束とはすなわち、日本における精神障害者の取り扱いに関することであろう。森有礼とドロティア・リンド・ディックスとの間に交わされた書簡、一つの癲癇病院を首尾よく設立いたしという文言からは、白痴院設立というより精神病院設立に関与したことが述べられている。森有礼は京都に一つ、東京には設立中であると書簡に書いている。この書簡の日付は1875年(明治8年)である。ドロティア・リンド・ディックスの森有礼へのアプローチが1872年(明治5年)であったとしたら、それから3年後に彼は約束を果たしたことになる。ゆえに森有礼が日本で始めて設立した白痴院とは精神病院のことであると考えられる。

## ■ ドロティア・リンド・ディックスの精神障害者取り扱いに関する改革運動

さて、わが国の為政者を動かし、精神障害者取り扱いに関する改革運動につなげたドロティア・リンド・ディックスとはどのような人物なのか。

『看護・医療の歴史』<sup>30)</sup>によればドロティア・リンド・ディックスは1861年(文久1年)南北戦争勃発時にアメリカ政府から看護監督を任命され、F. ナイチンゲールと連絡を取り合いながらアメリカ看護の組織作りをした女性である。しかしながら、同著作には彼女が精神病者のために厳しい戦いをした女性であるとの記述はない。ところが1955年の『リーダーズ・ダイジェスト』<sup>31)</sup>には“ここ300年間にアメリカが生んだ恐らく尤も卓越した女性、狂人病院の天使”という見出しでその業績が紹介されていた。それによればドロティア・リンド・ディックスはボストンの上流階級の娘として生まれた。彼女は1841年(天保12年)、教育の折、イーストンケンブリッジ郊外の矯正院女子部の中に、数名の精神病者がいて、暖房も寝具もなく、豚以上に汚れきった一室に監禁されている光景を目撃した。精神病者の実態に触れたその瞬間から彼女の生活は一変した。ドロティア・リンド・ディックスは自分の全生涯を通じて行わなければならない目標を見出したのである。

彼女のケンブリッジにおける調査では「気違いは生まれながら凶悪な人間だから、危険な動物として取り扱うのが一番よい。鎖の手錠をして嚴重に監禁しておくのが唯一の便法」<sup>32)</sup>であったと報告され、もっと悪いことには典獄<sup>33)</sup>や付き添いの多くが精神を患っている人を収容している家を見物に来る人たちから観覧料を取って懐を肥やしていることであった。実際この不幸せな人たちが「へんてこな仕草をするのを眺めたり、わめくのを聞いたり、あるいはステッキで突っついて怒らせたりすることは、大変面白い遊びだと考えられていたのである。」<sup>34)</sup>彼女はこの哀れな精神病者を人間扱いしてもらうための大きな戦いのための門出をした。その後の2年間、彼女はマサチューセッツの刑務所や救貧院などの調査を行った。ボストン郊外の養育院では若い女性が小さな離れ家に一人ぼっちで監禁されていた。「女は立って髪を振り乱し、体は汚れ放題で鉄格子にしがみつき、鉄格子をたたいていた。そこは汚物がだんだん溜まるのがやっというほどの狭いところでした。

みなさま、それはまことに不潔極まる光景でした。」<sup>35)</sup> ドロティア・リンド・ディックスの報告は続いた。ニュートンの町でトイレほどの狭いところに鎖でつながれている女性、グロートンでは若い男が重い鉄輪首にはめられ、二メートルに近い剛鉄の鎖で壁につながれているのを見た。リトル・コンプトンでは片足を鎖につながれて、わずか二メートル四方の石の独房に居るのを見た。光も入らず、空気の通う口もなかった。彼女は1843年(天保14年)、マサチューセッツ州へ以下のような建白書を書いた。「紳士諸氏、私はわが州内に檻の中で、押入れの中で、地下室で、馬車の中で、豚小屋の中で、全裸のまま鎖につながれ、鞭で打たれ、体刑を加えられて服従を強いられている精神病者の恐るべき実態に、諸氏のご注意を喚起したく存じます。」<sup>36)</sup> それは図らずも浦野シマが著作の冒頭に書いた“ダンテの戯曲 地獄の門”の描写にふさわしい地獄絵そのものであったろう。ドロティア・リンド・ディックスの報告によってマサチューセッツ州は慌ててオアセスター病院の中に200人分の上等の病室を用意したとされる。

ドロティア・リンド・ディックスは精神障害者保護のために活動を続けた。それはイギリス・スコットランドにも及び、政府の要官に訴えて1855年(安政2年)、精神病院改革のための王立委員会を設立させたほどである。イギリスではテューク・ウィリアム<sup>37)</sup>によって1796年(寛政8年)に初めて精神病者のための施設、ヨーク・リトリートが創設された。この頃、モラル・トリートメント(moral treatment)が提唱され、この治療法はイギリス人のモットーとなった<sup>38)</sup>。モラル・トリートメントとは患者が病的特性の克服を学ぶことは患者の心を強化し、自制という有益な習慣に導こうとする考え方である。自制という経験が習慣になれば病的特性が是正される。そうした人間的・教育的関わりが狂気を治そうとする際には最も重要なことであるという考え方である。

テューク・ウィリアムの孫であるテューク・サミュエル<sup>39)</sup>はヨーク・リトリートに強烈な刺激を受け、精神医学の開拓者になった。しかし、イギリスでも精神障害者に対する一般的な取り扱いは粗悪であったと考えられ、ドロティア・リンド・ディックスの提言によって精神病院の改革がなされた。ナイチンゲールが、家族から自立して最初に看護監督官として赴任した病院はロンドンの婦

人病院であった。彼女がそこに見たものは、将来への不安から精神を冒された女性達の姿であった。彼女は女性達が「dead body」<sup>40)</sup>になっていると述べ、人の精神の問題について言及した。心理学が哲学から独立したのは日が浅い<sup>41)</sup>。そしてドロティア・リンド・ディックスの精神障害者に対する改革運動はわが国にも及んだ。

## ■ 京都における精神衛生行政

先述したように森有礼はドロティア・リンド・ディックスへの手紙に京都に一つと書いている。それでは、森有礼が京都に設立したという精神病院はどこか。小野尚香の『精神衛生のあけぼの』<sup>42)</sup>『癲狂院の医学的背景』<sup>43)</sup>における調査報告では京都癲狂院が1875年(明治8年)に設立されている。岡田靖雄著の『日本精神科医療史』によれば癲狂という言葉は奈良時代の“養老律令”に既に見られており、その意味は癲病・狂病の二種類をいうと説明されている。著作には「癲は発するときに地に倒れて涎沫をはき、覺をとるなきなり、狂はみだりにふれてはしらんと欲し、あるいはみずから高賢とし、聖神者となり」<sup>44)</sup>と説明が加えられている。現在の精神疾患の中でも癲癇発作であろうと考えられる症状や統合失調症に見られる症状などが明記されており、癲狂という語源がここに由来し江戸時代も引き続き精神疾患には使われ、明治初期の精神病院に癲狂という言葉が使用されたと考えられる。

京都癲狂院の設立年は、森有礼がドロティア・リンド・ディックスに宛てた手紙の期日と符合する。しかし、小野尚香の報告では京都癲狂院は府官、明石博高<sup>45)</sup>の建議によって設立されたとされる。それでは森有礼が明石博高に命じて設立を促したのか。田中緑紅著『明治文化と明石博高翁 明石博高』には明石博高は岩倉具視<sup>46)</sup>の指図によって大阪に病院(後に大阪帝国大学医学部)を建てたこと<sup>47)</sup>、京都府療病院や医学校を建てたこと<sup>48)</sup>、1875年(明治8年)に療病の附属として南禅寺に癲狂院を設立した<sup>49)</sup>ことが記述されている。

明石厚明著『明石博高』<sup>50)</sup>には京都癲狂院設立については述べられておらず、森有礼が明石博高を動かして京都癲狂院を設立せしめたという記述、あるいは森有礼という名前もその生涯史には発見できない。しかし、その生涯史には大阪病院

や京都府療病院の設立が岩倉具視の指図であったり、明石博高自身が岩倉具視に相談をしたりしたことが記述されている。つまり、明石博高と岩倉具視との関係は密接であったと考えられる。岩倉具視と森有礼との関係は、森有礼が岩倉使節団に関与していたというわが国の歴史的事実から十分に考えることはできる。これらのことから考えると森有礼と明石博高の間に岩倉具視の存在があったということになる。彼らは時の政府の要人である。『南禅寺の歴史』には「討幕運動の中心理論は尊王思想であり、仏教とは対立的な神道を基調」<sup>51)</sup>と記述され、明治政府の高圧的ともいえる仏教政策は武士階級に保護され、発展してきた臨済宗とその性格の一番濃厚であった南禅寺との関係において顕著であったとしている。その一つが南禅寺境内に設立された癲狂院であったということであろう。『南禅寺の歴史』には明治維新と南禅寺との関係について克明に記述され、京都癲狂院設立に関する経緯が記述されている。著作の「如何に人道主義的事業であるにせよ、かつては御所の代表的建築であり」<sup>52)</sup>という文章に南禅寺関係者の驚きと戸惑いが明瞭である。

京都癲狂院における患者の処遇や治療法についてはドイツ人医師ヨンケル<sup>53)</sup>とイギリス精神科医モーズレー<sup>54)</sup>の知識が軸となった。そしてフランスの精神科医ピネル<sup>55)</sup>の人権思想による精神障害者の治療法に影響を受けた。ピネルは精神障害者を鎖からはずし、作業療法をさせた。この治療法はわが国にモラル・トリートメント(moral treatment)として導入された。モラル・トリートメントは医師と患者の人間関係の上に成立する治療法であり、生活環境を整え、患者の生活時間の中に散歩や、娯楽などを組み入れていく方法である。最も、須藤葵の調査<sup>56)</sup>によればピネルの業績はJean — Baptiste Pussin<sup>57)</sup>の貢献が大であるとする。Pussinは自身も精神障害者として入院し、その病氣回復後に精神病院に雇用された。Pussinは自己の経験も含め、精神病院における患者に対する取り扱いの酷さに人道主義的な取り扱いの必要を感じた。特に当時、妥当とされていた瀉血<sup>58)</sup>による病気の悪化と生命の危険性は限りなく多く、死亡例も頻繁であった。Pussinは「現在まで、殆どの病院において強暴な狂人は常に野獣と同じであると考えられ」<sup>59)</sup>と述べ、通常、虐待が狂人を怒に向かわせると述べている。Pussinの主張、狂人は殴られるべき

ではない、狂人は縛られるべきではないという主張は看護に生かされ、看護をする者の教育にも生かされた。京都癲狂病院の設立によって精神病学が導入され、精神を患っている人に対する取り扱いが大きく変化したのである。しかしながら、南禅寺方丈という建物に設立された京都癲狂院は一時的な貸与という形であり、寺院側からのたびたびの催促によって1882年(明治15年)癲狂院廃止が決定され、返還された。

## ■ 東京府癲狂病院の歴史と精神障害者の取り扱い

森有礼が東京に設立中であると述べた癲狂病院は恐らく東京府癲狂病院(現在の都立松沢病院)であろう。『松沢病院外史』<sup>60)</sup>には東京府癲狂病院の設立経緯について記述されている。

明治維新後、江戸は東京府となり、日本の首府となった。廃藩置県や内戦のために無宿人や病者が急増した。1872年(明治5年)、養育院<sup>61)</sup>が設立され、その中に狂人室が設けられた。収容者が120名に達し、身体疾患の重傷者は東京府病院に移されたが、精神病患者が68名も存在した。養育院が神田に移転するのを契機に、1879年(明治12年)正式に東京府癲狂病院が設立された。ここに初めて精神病者に対する本格的な施療が東京府癲狂病院で始まった。精神病院としては私的には奈良林一徳<sup>62)</sup>が1846年(弘化3年)江戸小松川に癲狂病院を開設している。この病院は1873年(明治6年)に小松川癲狂病院と改名、1901年(明治34年)には更に小松川精神病院と改名した。加藤照業(てるあき)は1875年(明治8年)精神科を開業したが、1878年(明治11年)には私立加藤癲癩病院を設立していた。

しかしながら、『松沢病院外史』やその他の関係資料を検索しても森有礼と東京府癲狂病院設立との直接的な関係は見出せない。現在のところ、接点は先述した岩倉具視であり、他伊藤博文など森有礼との交友関係で政治的には容易に東京府に癲狂病院を設立することは可能であったろう。もう一つの接点は1873年(明治6年)、森有礼がアメリカより帰国した際に設立した明六社にもあると考えられる。明六社設立に協力した人物はすべて、時の為政者、あるいは教育者としてわが国歴史に残る有数の重要人物である。特に箕作秋坪、箕作麟祥などはその親族に教育・医学関係者が多く菊地大麓<sup>63)</sup>や呉秀三もその一人である。特に

呉秀三は医学生時期『精神啓微』<sup>64)</sup>を著しており、精神医学に強い関心を持っていたことが伺える。以上人間関係を考えると、森有礼が明六社員を通して精神障害者の取り扱いに対して啓蒙したことも考えられる。

東京府癲狂病院の初代院長は長谷川泰<sup>65)</sup>である。この頃は独房であり、不潔な状態で監禁されていた。『松沢病院外史』<sup>66)</sup>には明治初年の私宅監置の状況が掲載されている。間取り、清潔、取り扱いなど、私宅の経済状況によって相違があった。1881年(明治14年)、東京府癲狂病院は本郷東片町に移転、中井常次郎<sup>67)</sup>が2代目院長となった。彼は精神病院の看護にはじめて女性の看護者を採用し、相部屋や運動場、庭園などを造り患者の慰安を図った。明治政府は東京大学の卒業生を欧州に留学させて各文化の習得にあたらせたが、精神病学として選任されたのが榊俣<sup>68)</sup>である。森有礼が文部大臣在任中の1886年(明治19年)、榊俣はベルリン留学から帰国した。帰国後、榊俣は東京帝国大学医学部精神病学講座担当教授に任命された。しかし、同大学内に精神科の病室がなかったため、東京府と相談し、東京府癲狂病院内に精神病理学教室を置くこととした。1886年(明治19年)、宮内省からのご下賜金によって東京府癲狂病院は巣鴨に新築移転した。1889年(明治22年)東京府癲狂病院は東京府巣鴨病院と改名した。次に1901年(明治34年)、呉秀三が欧州より帰国し東京府巣鴨病院の四代目院長に就任した。

## ■ 精神障害者の取り扱いに関する呉秀三の業績

### 1. 呉秀三と精神病院改革

岡田靖雄の『呉秀三—その生涯と業績』によれば<sup>69)</sup>呉秀三は幕末・明治期の広島藩医学者呉黄石<sup>70)</sup>の三男として1865年(慶応元年)江戸青山浅野家下屋敷で生まれた。1867年(慶応3年)2歳の頃に一時広島に戻るが、1872年(明治5年)上京、鞆絵小学校に入学した。1878年(明治11年)東京外語学校に入学、翌年、東京大学医学部予科に入学、1885年(明治18年)卒業した。同年、東京大学本科に入る。森有礼が“学校令”を發布した1886年(明治19年)、“帝国大学令”が發布された。この規則によって東京大学は帝国大学となった。このとき、従兄弟の菊地大麓が理科大学長となった。呉秀三は1890年(明治23年)に帝国大学を卒業した。が、卒業前の1899年(明治22年)に

『精神啓微』を著した。著作の内容は脳髓生理から形而上学の諸問題に触れ精神の本質を言及したものである。帝国大学卒業後、呉秀三は同大学で助手として勤め1893年(明治26年)には『人身生理学』<sup>71)</sup>を著した。内容は血液、呼吸、消化・吸収、神経、五感感覚といった現在の生理学的な内容である。最後に衛生一般として健康に関わる食事や居宅、衣服などについて論述している。呉秀三は1896年(明治29年)には医科大学助教授となり、広島県の医師たちによる芸備医学会創立のための協議会を開いた。同年、菊地大麓が東京帝国大学総長になる。1897年(明治30年)榊俣の突然の死亡により、呉秀三は文部省の命令で欧州に留学した。1901年(明治34年)菊地大麓は第一次桂内閣<sup>72)</sup>の時に文部大臣となった。同年、呉秀三は欧州留学より帰国した。彼は直ちに東京帝国大学医科大学教授に任ぜられ、精神病学講座担当を命ぜられた。同時に巣鴨病院の医長に就任(東京都衛生行政史には院長とかかれているが松沢病院90年史には医長とかかれている。)した。巣鴨病院就任後、直ちに手革・足革・縛衣などの拘束具を廃止、女子に主として用いられていた布団まきを制限・禁止した。同時に患者に作業療法を開始した。精神科医であり・歌人でもある斎藤茂吉<sup>73)</sup>は呉秀三の第一印象を以下のように述べている。「独逸公使の次に額広く、眼光鋭く、鬚が豊かで、後年写真で見たニーチェの鬚のような鬚をもった一人の学者」<sup>74)</sup>であったと。ニーチェ<sup>75)</sup>はドイツの思想家である。次に呉秀三は1917年(大正6年)東京府巣鴨病院移転の計画書と意見書を東京府に提出した。結果、荏原郡松沢村への移転が正式に決定され、1919年(大正8年)、現在の地に松沢病院が新設された。呉秀三の病院内改革は急速に進められた。無拘束治療、作業療法、病院規則の整備と看護婦の教育などである。作業療法の一環としてなされた將軍池や加藤山と呼ばれる築山を病院の一角に完成させた。これは現在でも都立松沢病院敷地内に残っている。また、近代欧州精神医学の導入と精神医学研究、精神医学教育(教科書と医師教育)を行った。また、呉秀三はクレペリン<sup>76)</sup>の概念をわが国に導入した。

呉秀三は1902年(明治35年)に『癲狂院の設立は何か為に踟躕(ちちゅう)さるゝや』<sup>77)</sup>という論文を医界時報に掲載、癲狂救済は明らかに国家及び社会の慈善的義務であると同時に治安秩序を保つために取るべき至福の責任であると主張して

いた。彼は1918年（大正7年）には医学士櫻田五郎と共同で『精神病者私宅監置の状況及びその統計的観察』<sup>78)</sup>と題した報告書を内務省に提出した。彼はその序文に「精神病者ハ自ラ知ラズ自ラ救フ能ハザル疾患ニ罹リ、其境遇ニ於テ最悪ムベキモノタルノ一方ニ於テ、社会ノ秩序ヲ危クシ公衆ノ安寧ヲ破ラントスル危険ナル證状エヲ呈スルモノナレバ、一面之ヲ救済シ一面之ヲ保護スルハ、吾人ノ責任ニシテ又吾人ノ義務ナリ」<sup>79)</sup>と述べ、その病気は不治の病ではないので他の病気同様、適切な時期に入院させ、適切な治療を受けさせるべきであると述べている。この報告書は“精神病院法”の根拠になった。“精神病院法”の第一条には道府県に精神病院の設置を命ずることができるというものである。1919年（大正8年）から1950年（昭和25年）時代に制定された“精神病院法”と“精神病者監護法”によって座敷牢などに閉じ込められていた精神障害者が病院に収容されるようになった。“精神病者監護法”制定の背景には相馬事件<sup>80)</sup>というお家騒動が発端であるといわれている。この一連の騒動で精神病者の処遇に対する法律がないことが明らかになり、“精神病者監護法”によって精神病者の処遇の原則を定めた。しかし、自宅監禁から病院への収容は、社会からの隔絶をも意味し監禁同然の処遇であることに對し問題提起がなされた。又、精神病者の食餌に関する問題の改善に尽力したのは鈴木芳次<sup>81)</sup>である。彼は動物待遇から人間待遇へという自己の主張を基に精神病者の食における待遇改善に力を尽くした<sup>82)</sup>。

## 2. 精神病院における看護婦の養成

東京府癲狂病院の設立によって多くの精神障害者が収容されたが、看護にあたる人は全て男性であり、名称は救護人であった。その役割は日々患者に食事を与えることである。1981年（明治14年）には精神障害者看護のために看護婦を採用したが、当時の看護婦の社会的地位が低い上に職業的自覚もなかったのも、雑役婦と同じような仕事をしていた。もちろん、このころ、専門職としての看護婦を養成する機運はなかったから、これらの看護婦が何らかの教育を受けていたわけではない。このころアメリカでも精神病院における看護も決して高いとは言えない状況があった。1884年（明治17年）、アメリカの地を踏んだ内村鑑三がまず、最初に行った仕事は看護人である。彼は著作

『如何にして基督信徒となりし乎』の中で、帝国政府の一官吏から白痴院の看護人としての経験を述べた。この白痴院（The Pennsylvania Training School for Feeble-minded Children）はペンシルヴァニア州のエルフィンにあり、1864年（慶応元年）から、カーリン<sup>83)</sup>医師が院長であった。“道徳的白痴”に関するカーリン院長の最大の主張は“両親の間違いと劣悪な環境によって生ずる体質上の墮落である”というものである。内村鑑三はカーリン院長、カーリン院長夫人あるいは病院の婦長をドロティア・リンド・ディックスと同列に考えながら、彼らとの感激的な出会いを述べ、「あらゆる善意と全ての人間に対する平和的關係」<sup>84)</sup>の源泉が基督教的寛大さであると述べている。

その後、アメリカでは実務看護を担うものとして男性看護人計画があった。通常は短期教育である。1888年（明治21年）、ニューヨークのベルビュー病院では二年課程の職業学校があった。彼らは付添い人と呼ばれた。1943年（昭和18年）には男性だけの看護学校は4校であった。有名なブラウン報告の提言では、男性看護人についても提言している。その一つは看護者として男性をもっと大々的に活用することである<sup>85)</sup>という提言である。

『松沢病院90年史』<sup>86)</sup>によれば、1901年（明治34年）、榊保三郎<sup>87)</sup>が精神病院における看護者の質の向上を図るために、私的に看護者の教育を行い、その経験から『癲狂院に於る精神病看護学』をまとめ、看護者に配布した。『日本精神看護史』<sup>88)</sup>によれば、その内容は精神病者の定義、精神病看護人の性質、看護人互の交際、看護人患者との交際、精神病者の床臥療法、監視区及監視義務、患者の逃走について、患者強制器などである。精神病者は決して放火や殺人などの大罪を犯した人ではなく、先天性あるいは後天性に脳の病を持った人たちなので、その辺りを十分に留意して看護に当たるよう看護人の人格なども含め、身を高潔にして看護にあたるようにと書かれている。『東京都衛生行政史』<sup>89)</sup>によれば、東京都がはじめて看護婦の養成に着手したのは松沢病院付属看護婦養成所である。1906年（明治39年）には看護人養成規則が交付され、東京府巢鴨病院看護婦養成所が発足した。ここに初めて精神病院における看護者の教育が本格的に開始されたのである。呉秀三の要請によって松沢病院に赴任した石橋ハヤ<sup>90)</sup>が看護教育の責任を担った。石橋ハヤは“狂者の慈母”として慕われたという<sup>91)</sup>。同養成所の教育課



程は以下のとおりであった。

入学資格；満17—40歳以下の者で高等小学校以上の学力を持つもの（開設当時）

修業年限；3年間，学説講義 1年間……前期は病院勤務，後期講義

実地修練；2年間……3年次後期は試験，合格したら免許が付与される。（浦野シマ証言より）

学 説；精神病者看護法，解剖生理大意，外科的看護法，内的看護法，伝染病者看護法，衛生学大意，倫理（看護人に要する倫理）

入学者の資格に男女の別はない。東京府が看護婦規則を制定したのは1900年（明治33年）であり，国家的な看護婦規則は（大正4年）である。学説というのは学問上の道理を説くことである。つまり，東京府巣鴨病院看護婦養成所では精神病者看護法から看護人に要する倫理までの学科目が教育されたことになる。東京府看護婦規則には試験科目として看護法・解剖生理学・伝染病予防法が規定されている。大正4年の看護婦規則ではやはり，試験科目として人体の構造及び主要器官の名称・看護法・衛生及び伝染病大意・消毒方法・包帯術及び器械の取り扱い法・救急処置が規定されている。東京府巣鴨病院看護婦養成所は両規則に加え，精神病者看護法や倫理が加わって教育されたことになり，両規則より内容的により教育がなされたといえるであろう。そこで同校の教育修了者は無試験で免許が与えられた。この後，巣鴨病院が病院拡張のために荏原郡松沢村に移転し，松沢病院と改名した事により，養成所の名称も東京府松沢病院看護婦養成所と改称された。本養成所は戦後の1951年（昭和26年）に廃校になったが，その間養成された看護婦は374名，看護人は268名であった。

## ■ 精神障害者の人権と自立促進への援助

ドロティア・リンド・ディックスが精神障害者の為の戦いに出た1841年（天保12年），アメリカではニコラス・ブラウン（Nicholas Brown）という人物が狂人のための収容施設に3万ドルを寄付した。彼の寄付によってアメリカ最高のバトラー病院が設立された。アメリカで精神科の看護婦を

教育する初めての学校は，1882年（明治15年），マサチューセッツのマックリオン病院に設置された。しかし，精神看護を引き受ける看護婦の地位は高いものではなかった。

1908年（明治41年），クリフォード・ビアース（Clifford W. Beers）は精神障害の発病と入院後の悲惨な環境と虐待を経験した<sup>92）</sup>彼はその著『わが魂に会おうまで』の中で「悪魔でさえ足を踏み入れるのを恐れるところ」<sup>93）</sup>と精神病院を表現した。しかし彼はその経験から自己の魂にであい，逆境を克服し，コネチカットに精神衛生協会（The Connecticut Society for Mental Hygiene）を設立した。1909年（明治42年），それは全国精神衛生協会（The National Committee for Mental Hygiene）に発展した。この精神衛生協会はアドルフ・マイヤー<sup>94）</sup>やウィリアム・ジェームズ<sup>95）</sup>の推薦により多くの学者が会員となり，1930年（昭和5年）には第一回国際大会が開催され，53カ国がワシントンに集まった<sup>96）</sup>。しかしながら，精神障害者に対する取り扱いは決してよいとはいえない状況にあった。1955年（昭和30年），バトラー病院は一時閉鎖された。が，1957年（昭和32年），種々の保健・福祉機関のバトラー保健センターが開設された。

ウオードの小説『蛇の穴』<sup>97）</sup>は，作者自身の精神病院への入院経験を丹念に描写したものである。著作の冒頭に彼女は「大昔，人は狂人を蛇の穴に投げ入れた。正気の間人を発狂させるような経験が，狂人を正気に立ち返らせはしまいかと考えたからである。」と述べている。ウオードが入院した精神病院は“蛇の穴”と思えるほどの恐怖を経験した強烈な場所としての認識が残ったのであろう。入院患者は動物のように檻に入れられ，その扱いはまさに人間としての扱いではなかったと述べている。どろどろの眠りの中で，自分自身が何者かどこにいるのかも認識できない状況で行われる治療，それは衝撃を与えるためのインシュリン（insulin coma therapy）や電気を使う療法（electro therapy），身体訓練（physical training），服装療法（dressing therapy），職業療法（occupational therapy），冷たい水に浸る水治療，“詰め”と呼ばれる治療などである。彼女は著作を通して自己の治療経験を生々しく読者に伝え，中でも精神障害者が人として取り扱われていなかったことを証言した。特に彼女の認識をとおして伝えられる看護婦は精神病を患っている人には恐怖の存在であった。看護婦は単に患者の見張り役であり，動



物達が整然と列を作って檻の中に入っていくさまを管理するかのような役割であった。そうした中で彼女は、彼女自身で思考療法 (thinking therapy) を考え出し、小説家としての自己を取り戻した。小説『蛇の穴』はアメリカにおける精神障害者の人権問題に大きく影響を与えた。

わが国もそれに呼応するかのようになり1950年(昭和25年)には従来の“精神監護法”に変わって“精神衛生法”が制定された。その第一条には、「この法律は、精神障害者等の医療及び保護を行い、且つ、その発生の予防に努めることによって、国民の精神的健康の保持及び向上を図ることを目的とする。」<sup>98)</sup>と規定された。この法律以後、精神医学が更に進歩し、人権意識が高まった。1984年(昭和59年)に引き起こされた宇都宮事件<sup>99)</sup>は精神医療の質の問題を露呈させた。この事件以降、精神障害者の取り扱いに対する国民の関心が高まると同時に精神医療に対する激しい非難が国内外から起きた。入院患者の人権保障や社会復帰の制度化が検討され、1987年(昭和62年)には“精神衛生法”が“精神保健法”に改正、翌1988年(昭和63年)に交付された。“精神保健法”の第一条の目的は「この法律は、精神障害者等の医療及び保護を行い、その社会復帰を促進し、並びにその発生の予防その他国民の精神的健康の保持及び増進に努めることによって、精神障害者等の福祉の増進及び国民の精神保健の向上を図ることを目的とする。」<sup>100)</sup>と述べられ、社会復帰を前面に押し出した規則に変わった。更に精神的健康の保持のみならず保持増進、及び精神保健の向上を図ることも条文に追加され、国民の精神保健への取り組みが積極的になされようとしたことが伺える。この背景には貧困であった時代にはなかった精神の退廃もまた社会的現象として認められたということであろう。1995年(平成7年)には“精神保健及び精神障害者福祉に関する法律”が制定された。“精神保健及び精神障害者福祉に関する法律”の第一条の目的は「この法律は、精神障害者等の医療及び保護を行い、その社会復帰の促進及びその自立と社会活動への参加の促進のために必要な援助を行い、並びにその発生の予防その他国民の精神的健康の保持及び増進に努めることによって、精神障害者等の福祉の増進及び国民の精神保健の向上を図ることを目的とする。」<sup>101)</sup>と規定された。つまり、この法律の変更目的は精神障害者の社会復帰の促進とその自立を目指したものである。こ

れらの法律が改正されることによって病院への監禁から、社会復帰を促すような働きかけがなされ、更に自立と社会活動ができるように支援することが必要になる。

精神障害者の社会復帰を考えた場合、回復過程にある患者が安心して社会生活が送れるような環境の整備が必要であろう。今日、精神病者を生む家族の病理を考えたとき、家族単位で考えるケアとして家族療法あるいは家族看護が実践されている。呉秀三は既に精神病者は国家の保護を必要とすることはいうまでもないが、軽症の患者は病院に入院させるよりも家族看護がよいと提唱したが、それは現在提唱されている在宅看護や家族療法を意味しているのではない。呉秀三は1902年(明治35年)に『癲狂院ノ家族看護法ニ就テ』という論文で「患者自己ノ家族若シクハ其一族ハ財産ノ関係、家政ノ状態、家事萬般ノ関係及家人ノ性質ガ精神病者ヲ委託スルニ適當セザレバナリ要スルニ患者自身ノ家族ハ己ニ精神病者ヲ出スガ如キ原因ノ潜伏シツツアレバ之ニ看護ヲ委託セシムルニ外ナラズ」<sup>102)</sup>と述べ、患者にまったく関係のない一定の家族に精神病者の看護法や管理法を教授して委託保護させるのは最も適切な方法であると述べている。彼はこの主張の根拠としてベルギーやスコットランドでの実践、あるいはわが国の京都岩見村での実践などを挙げている。呉秀三のこの構想は実現しにくい社会状況があったと考えられるが精神を病んだ人の社会への適応を考えたとき、今日、必要なケアとして再考されるべきであろう。

## ■ 結 語

わが国の精神障害者の取り扱いは私宅監禁から精神病院への保護・治療、そして今日精神病院から社会的自立へと大きく転換されようとしている。その中で大きくクローズアップされるのは精神障害者の人権の問題であり、社会への適応をいかに支援するかということである。特に看護にあたるものはその理解が必要であろう。『看護・医療の歴史』には、アメリカにおける精神科看護及び精神衛生に関する歴史的展開について述べ、それらの研究領域として、精神医学の発達と心理学の創設などが重要な役割を果たしたと述べている<sup>103)</sup>。「精神科疾患に対する関心の増大は、体内あるいは対外から人間の中に病理学的変化を作り

出し、人間を冒す要因の影響を明らかにし、心理分析へと次第に進んでいった。又、国民の保健問題として精神疾患の範囲について理解が増し、全ての人々の情緒的ニードの大きさや、人間行動を理解すべきあらゆる保健従事者の義務が注目された。」<sup>104)</sup> アメリカではフロイト<sup>105)</sup>の精神分析を発展させた第一の心理学、ワトソン<sup>106)</sup>提唱の第二の行動心理学、マズローが提唱する第三の心理学が存在する。アメリカにおける心理学関係の研究者の豊富さは世界に類をみない。1948年(昭和23年)になされた有名なブラウン報告の提言では、精神病院に各々独自の学校を運営させる代わりに、むしろ、精神科看護の場として精神病院の活用を考えることの必要性が述べられている<sup>107)</sup>。アメリカの看護研究者達は独自の理論に心理学を

取り入れ、わが国もこれらの心理学から多くのものを学んでいる。精神を病んだ人の看護に特に重要なのは人間理解である。人間社会における相互の関係は情緒的な安定につながるが、逆にひずみにもなり得る。人々の情緒的ニードの大きさや、人間行動の理解はあらゆる保健従事者の義務であり、人と環境との相互作用の中で情緒的な問題が個人の精神を病ます要因になりえる。今日、精神障害者を病院から社会へ解放せよとの主張がなされている。精神を病んだ人を社会へ開放するためには社会の適切な受け入れが必要であり、そのためには彼らが社会に適応できるような環境の調整及び精神的ケアが必要である。地域社会において日常生活が営めるような環境を整えることが肝要である。

## 注

- 1) わが国の精神科医療の歴史をめぐって；医学界新聞第2526号，2003年3月10日付け，前東京大学教授原田憲一，『日本精神科医療史』の著者で精神科医療史研究会世話人／元荒川生協病院医師の岡田靖雄の三者で座談会を行った記録
- 2) ドロティア・リンド・ディクス (Dorothea Lynde Dix 1802-1887)；アメリカの婦人慈善家でユニテリアン教徒。1861年に陸軍看護婦監督に任命され，陸軍大臣から陸軍看護婦部隊の編成補充の権限と責任が与えられた。看護婦のトレーニングの経歴はなかったが，過去の慈善事業で巧みな組織力を持っていた。病弱の身をもって監獄，養老院，白痴院の建設改良に努力した。その足跡はアメリカの各州及びヨーロッパの各国に及んだ。日本にも当時のワシントン駐在代理大使森有礼を動かし，白痴院を建設せしめた。
- 3) 森有礼 (1847-1889)；明治初期の外交官，初代文部大臣
- 4) 呉秀三 (1865-1919)；明治期から昭和期にかけての精神病学者。
- 5) 呉秀三・樫田五郎の両者が1910年(明治43年)から調査を開始して1918年(大正6年)に報告した『精神病者私宅監置ノ實況及び其統計的観察』
- 6) 内村鑑三 (1861-1930)；明治から大正期の教育者。キリスト教徒。教育勅語発布後に不敬事件を起こして辞職した。その後，著作業に専念，平和主義者として多くの人々に感化を及ぼした。
- 7) 内村鑑三著，鈴木俊郎訳；余は如何にして基督信徒となりし乎 (1895年)，岩波書店，1999年，p.218
- 8) 上野景範 (1844-1888)；明治期初期の外交官。薩摩藩士族。1856年(安政3年)長崎で洋学を学ぶ。1862年(文久2年)洋学研究のため上海密航。1872年(明治5年)外務少輔。1885年(明治18年)元老院議員となる。
- 9) スпенサー (Herbert Spencer 1820-1903)；イギリスの哲学者。鉄道技師から経済新聞の記者となる。イギリス経験論の『総合哲学体系』を確立した。彼の思想は功利主義の自然科学万能の風潮を背景に，ダーウィニズムの運動と結びついて広く普及した。
- 10) ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill 1806-1873)；イギリスの哲学者，経済学者。
- 11) 新島襄 (1843-1890)；明治期の啓蒙思想家及び教育者。アリカン・ボードの宣教師。同志社大学を設立した。
- 12) 明六社；1873年(明治6年)アメリカから帰国した森有礼が西洋文明国流の学会・啓蒙活動の団体として設立する事を発起し，自ら社長に就任した。社名は設立年度に由来している。
- 13) 西村茂樹 (1828-1902)；天皇の待講。1876年(明治9年)東京修学社を設立，主として修身教科書

執筆と教育指導明治20年に“日本弘道会”と改名し、積極的に道德教育を行った。

- 14) 西周 (1829-1897)；明治時代の思想家。津和野藩の出身。父親は医師。
- 15) 中村正直 (1832-1891)；明治初期の優れた教育者・啓蒙的学者である。幕府の派遣した留学生の取締りとしてロンドンへ同行、その市民社会の実情に触れた。1868年（明治元年）帰国。静岡学問所の一等教授となった。彼は教授のかたわら、スマイルズの『自助論』とミルの『自由論』を翻訳、前者を『西国立志編』後者を『自由の理』として出版した。
- 16) 加藤弘之 (1836-1916)；哲学者・法学者、1890年（明治23年）帝国大学総長、貴族院議員となった。わが国大学制度の基礎整備の最高責任者。生涯を一貫した官僚主義で貫いた。
- 17) 福沢諭吉 (1834-1901)；慶応義塾大学の創始者。1878年（明治11年）ごろから自由民権運動に巻き込まれた。著作に『学問のすすめ』がある。教育者としての彼の精神は独立自尊である。
- 18) 箕作秋坪 (1825-1886年)；備中国上砦部村の教諭所菊地土郎の次男として生まれた。13歳の時に父を失い、津山藩の儒者稲垣茂松に引き取られた。緒方洪庵の門下生として教育を受けた後、箕作阮甫の次女つねと結婚、秋坪の次男（菊池大麓 (1855-1917；東大教授、同大学総長、文部大臣）が実家の姓を継いだ。医師としての役割よりも幕末維新の外交問題処理に洋学者としての役割が多い。維新後は英学塾「三又学社」を開設、東郷平八郎や原敬などが入門した。明六社の設立にかかわり、森有礼の跡に社長に就任した。
- 19) 箕作麟祥 (1846-1897年)；箕作阮甫の三女しんの長男、父親が生後4ヶ月で死亡した後、母親が秋坪と結婚、箕作阮甫夫妻に育てられ、祖父から洋学を学んだ。1867年（慶応3年）フランスに留学。帰国後、新政府に招かれ、翻訳官・調査官として活躍。欧米諸法典の翻訳編集にあたり、その日本への移植やわが国の成文法の起草に貢献した。明六社員として啓蒙活動にも力を注いだ。
- 20) 明六雑誌；森有礼が発議して結成された明六社の機関紙。わが国最初の総合学術雑誌。
- 21) 原田実著；森有礼，牧書店，1966年
- 22) 坂元盛秋著；森有礼の思想，時事通信社，1969年
- 23) 犬塚孝明著；若き日の森有礼，鹿児島テレビ，1983年
- 24) 犬塚孝明著；森有礼，吉川弘文館，1986年
- 25) 大久保利謙編；森有礼全集，宣文堂書店，1972年
- 26) 明六社；明六雑誌，1874-1875（明治7-8年）
- 27) 浦野シマ (1913- )；東京都府中市に生まれる。東京府松沢病院看護婦養成所を卒業した。1948年（昭和23年）松沢病院婦長を拝命、1970年（昭和45年）同病院退職、1973年（昭和48年），勲五等瑞宝章拝受，全国自治体協議会精神部会総婦長会初代会長，東京精神病院協会婦長会初代会長，各看護専門学院精神科講師及び各精神病院・家族会コンサルタントを歴任した。現在，社会福祉法人若松会理事長として，精神障害者の社会復帰のための施設を設立，現役活躍中。
- 28) 浦野シマ著；ドロシア・ディックスと近代日本の精神病院の淵源，看護 Vol.29, No.5, 1977年, p.134
- 29) 同前掲書28), p.134
- 30) Josephine A. Dolan (1973), Nursing in Society (小野泰博他訳；看護・医療の歴史，誠信書房，2001年)
- 31) スチュアート ホルブルック著；狂人病院の天使，リーダーズ・ダイジェスト，1955年，8月号
- 32) スチュアート ホルブルック著；前掲書31), p.102
- 33) 典獄；刑務所の長のことを言う。
- 34) スチュアート ホルブルック著；前掲書31), p.102
- 35) 同前掲書，p.104
- 36) F・Nightingale (1858), Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals, (湯楨ます他訳；女性による陸軍病院の看護，ナイチンゲール著作集第一巻，現代社，1985年，p.29)
- 37) テューク・ウィリアム (Tuke William 1732-1822)；クエーカー教徒の慈善家。ヨークで紅茶とコーヒーを商い，精神病者のための施設を創設した。フランスのピネルと同じく精神障害者の新しい治

療法と看護法を開拓した。

- 38) Edward Shorter, A History of Psychiatry (木村定訳；精神医学の歴史, 青土社, 1999年, p.61)
- 39) テューク・サミュエル (Tuke Samuel 1784-1857); 精神医学の開拓者。ノースヨークシャー生まれ。子供の頃に一族が建てたヨークトリートに強烈な興味を持った。彼の『トリート洋説 (1813年)』には精神療法の原則に関する古典的な説明がなされている。彼の息子ダニエル (1825-1895) も優れた精神科医となった。
- 40) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale ; Cassandra/Suggestions for Thought, Pickering & Chatto Limited, 1991年, p.95
- 41) 同前掲書40)
- 42) 小野尚香著；精神衛生のあけぼの, 保健婦雑誌, Vol.50, No.3, 1994年, pp.241-243
- 43) 小野尚香著；癲狂院の医学的背景, 保健婦雑誌, Vol.50, No.4, 1994年, pp.326-329
- 44) 岡田康雄著；日本精神科医療史, 医学書院, 2002年, p.4
- 45) 明石博高 (1839-1910); 京都生まれ。明治時代京都において殖産興業・医療政策・救済政策などを中心として近代文明の指導的役割を果たした人。祖父から西洋医学・化学を, 津藩医官柏原学介より解剖学・生理学などを学んだ。1870年 (明治3年), 京都府官になった明石は1878年 (明治8年), 精神障害者のための施設設立に奔走したが, 着任早々行ったのは性病対策であった。彼はボードイン (Antonius F. Bauduin) の進言により, わが国で初めて祇園に開設した療病館で梅毒の検診を行った。
- 46) 岩倉具視 (1825-1883); 幕末・明治時代初期の公家出身の政治家。公武合体 (幕府と朝廷との協力関係) をすすめ, 和の宮の降嫁をはかったので, 尊王攘夷派の反感を買い, 一時, 京都岩倉村に蟄居した。1867年 (慶応3年) 明治天皇に許されて宮中に戻った。明治新政府では右大臣となり, 1871年 (明治4年) 遣外使節団としてアメリカ・ヨーロッパ諸国を視察し, 帰国後は征韓派をおさえて, 内政の充実に努めた。
- 47) 田中緑紅著；明治文化と明石博高翁, 明石博高翁顕彰会, 1942年, p.23
- 48) 田中緑紅著；前掲書46), pp.68-69
- 49) 田中緑紅著；前掲書46), p.77
- 50) 明石厚明著；明石博高, 明石博高翁顕彰会, 1916年
- 51) 桜井景雄著；南禅寺の歴史, 大本山南禅寺, 1954年, p.228
- 52) 桜井景雄著；前掲書50), p.266
- 53) ヨンケル (Lanngegg Junker 1828-不詳); オーストリア, ウイーンの生まれ。イギリス国籍のドイツ人。ウィーン大学卒業後, イギリスに渡り, ロンドンで外科および産婦人科を研修, 同地で開業した。1870年 (明治3年) 独逸陸軍軍医, 京都府の招きで1872年 (明治5年) 来日し, 京都府療病院 (後の京都府立医大) で1876年 (明治9年) まで教育と診療に従事した。1882年 (明治15年) ロンドンに戻ったが, 消息不明。
- 54) モーズレー (Henry Maudsley 1835-1918); 英国の精神科医。マンチェスター精神病院の医師でユニバーシティ・カレッジの法医学教授。ロンドンのデンマークヒルにあるモスリー病院は彼の名にちなむ。著作『精神病約説』
- 55) ピネル (Philippe Pinel 1745-1826); 精神障害者の新しい治療法と看護法を開拓した。彼は1793年 (寛政5年) にパリのピセトル病院に収容されている精神病者から鎖をはずし, 作業につかせるという治療法を試みた。
- 56) 須藤葵著；Jean-Baptiste Pussin の精神病者看護思想, 日本看護歴史学会誌, No.16, 2003年, pp.41-56
- 57) Jean-Baptiste Pussin (1745-1811); 1771年に気鬱で入院後, 元入院患者を雇用するといった当時の考えの中でピセトル病院に雇用された。1793年にピネルと出会う。1802年にピネルの要請によってラ・サルベトリエール病院に転任, その後, ピネルの勧めによってブリュッセル大学に入学, 医師の資格を取得した。

- 58) 瀉血；治療の目的で血液の一部を体外に除去すること。精神科領域の治療法として今では考えられないことであるが、この方法は当時、例えば肺炎にでも行われていた方法である。
- 59) 須藤葵著；Jean Baptiste Pussin の精神病者看護思想，日本看護歴史学会誌，No.16，2003年，p.47
- 60) 金子嗣朗著；松沢病院外史，日本評論社，1982年
- 61) 養育院；1872（明治5）年，「乞食」「浮浪者」「迷子」を収容するために設立された。後には満期出獄の囚人も収容した。
- 62) 奈良林一徳（1822-1905）；江戸小松川村で漢方薬を用いて精神病者の治療を始めた。
- 63) 菊池大麗（1855-1917）；明治大正時代の哲学者，教育家にして政治家。1898年（明治31年）帝国大学総長となり，1901年（明治34年）文部大臣となった。菊池大麗は呉秀三の母親の妹の子供であり，呉秀三とは従兄弟の関係にあたる。
- 64) 呉秀三著；精神啓微（脳髓生理），松崎留吉，1889年
- 65) 長谷川泰（1842-1912）；明治期の医学者であると同時に政治家でもある。西洋医養成のために済生学舎を設立した。わが国最初の女医吉岡弥生もここで学んだ。1869年（明治2年）の頃は東京大学医学部付属病院東校の少助教になっている。
- 66) 金子嗣朗著；松沢病院外史，日本評論社，1982年
- 67) 中井常次郎（1851-1914）；大学東校で学んだ医師で西洋流産婆養成のさきがけをなした医師。精神科の専門医ではなかったが，東京府癲狂病院院長となり，毎日回診を行い，精神病患者の虐待を減少させた。相馬事件では東京癲狂病院院長として藩主の主治医であった。彼は相馬藩家臣錦織によって藩主殺害に加担したと疑われ罪に問われた。
- 68) 榊椒（1857-1897）；1882年（明治15年），文部省から精神病学研修のために，ベルリン留学，1886年（明治19年）帰国した。彼は直ちに東京帝国大学医科大学精神病学講座担当教授に任命された。同時に東京府癲狂病院内に精神病理学教室をおき，診療と臨床講義を行った。榊はわが国で最初に西洋の精神医学を修めた精神科専門医として病院医療の整備，患者統計の整備，臨床研究などの方面で精神病学の基礎を作った。
- 69) 岡田靖雄の『呉秀三—その生涯と業績』，思文閣出版，1982年
- 70) 呉黄石（1810-1879）；本来の名前は貞胤通称黄石。父親も藩医学者である。呉浦荘山田（現在の広島県呉市）に居住していたことから呉と改名。鹿島で恵美三圭に漢医を学び，後に江戸に出て伊藤玄朴に西洋医学を学んだ。その後，蘭医を学び，江戸医学所，幕府の歩兵屯所・広島医学所などを歴任した。江戸後期の洋学者・医師箕作阮甫（みつくりげんぽ 1799-1863）の長女せきと結婚し，3男4女を設けた。呉秀三は呉黄石の3男
- 71) 呉秀三著；新撰人身生理学；富山房書店，1894年
- 72) 第一次桂内閣；桂太郎によって組閣された。桂太郎（1847-1913）は萩藩士，桂興一右衛門の長男として萩城下に生まれた。戊辰戦争に従軍，維新後陸軍に入り兵制研究のためドイツに留学した。1898年（明治31年）には陸軍大将となり，第三次伊藤博文内閣の時陸軍大臣となった。1900年（明治33年）には現在の拓殖大学を創設した。1901年（明治34年）には首相となり，第一次桂内閣を組織し，日英同盟の締結・日露戦争を処理した。
- 73) 斎藤茂吉（1882-1953）；歌人・医師。南村山郡農家森谷熊次郎の三男。1905年（明治38年）親戚の医師，斎藤紀一の養子になり，東大医科大学に進んだ。翌1906年（明治39年）法医学教室で呉秀三の心理学講座に参加，卒業後の1911年（明治44年）に呉秀三の門下生として東京府巢鴨病院に赴いた。
- 74) 斎藤茂吉著；呉秀三先生，斎藤茂吉選集 第8号，岩波書店，1981年，p.50
- 75) ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900年）；ドイツの思想家。キリスト教に由来したヨーロッパ文明の精神的退廃や資本主義的生産様式による人間の機械化，奴隷化に対する批判は，抑圧された個人や生の解放のために大きな歴史的役割を果たした。
- 76) クレペリン（Emil Kraepelin 1856-1926）；ドイツの精神医学者。彼の精神医学はヴィントの心理学を基礎として樹立された。内因性精神病において早発性痴呆と躁うつ病を対比させたが，心理学的方面では作業曲線の分析（クレペリン検査）で精神作業の量的分析を行った。

- 77) 呉秀三著；癲狂院の設立は何か為に踟躕さるゝや，医界時報（395号），1902年1月1日付け
- 78) 呉秀三・樫田五郎著；精神病者私宅監置ノ實況及び其統計的觀察，創造出版，2000年
- 79) 同前掲書，p.1
- 80) 相馬事件；1877年（明治10年）頃，旧相馬中村藩主子爵相馬誠胤（ともたね）精神病発病，1879年（明治12年）病状悪化，監禁願→座敷牢，1883年（明治16年），旧家臣錦織剛清が私宅監禁告発，1883年-明治17年）加藤癲癇病院→東京府癲狂病院入院，発症鑑定は狂躁発作を有する鬱病。1886年（明治19年），錦織剛清は東京府癲狂病院入院中の患者を奪還，背後に後藤新平などを担ぎ出し，不法監禁の告訴を行った。告訴されたものは相馬家の家令志賀直道（志賀直哉の父），先代胤の妻，東京府癲狂病院院長中井常次郎などであり，家族もこれに反して告訴をするなど，中井院長他錦織剛清もそれぞれ鎖につながれた事件である。
- 81) 鈴木芳次（1912-1989）；都立松沢病院の管理栄養士，浦野シマの夫，彼は自己の職責から患者給食の改善を求め，動物待遇から人間待遇へという主張を『臨床栄養』へ寄稿を連載で行った。彼の死後，その論文は『精神病と患者給食—その改革を求めて』にまとめられた。
- 82) 鈴木芳次著；精神病と患者給食—その改革を求めて，第一出版，1990年
- 83) カーリン（Issac Newton kerlin 1834-1893）；アメリカにおける精神医学の開拓者。
- 84) 内村鑑三著，鈴木俊郎訳；前掲書7），p.136
- 85) Josephine A. Dolan，前掲書28），p.385
- 86) 精神医療史研究会；松沢病院90年史，1972年
- 87) 榊保三郎；榊俣（1857-1897）の弟
- 88) 浦野シマ著；精神科看護史，牧野書店，1983年，pp.52-56
- 89) 東京都；東京都衛生行政史，1961年
- 90) 石橋ハヤ（1880-1961）；1901年（明治34年），東京帝国大学附属病院看護法講習科卒。1904年（明治37年），呉秀三の要請によって松沢病院に赴任，親切・愛情・忍耐の精神によって看護教育を実践した。1955年（昭和30年），わが国最初のフローレンス・ナイチンゲール記章を受賞した。『石橋ハヤ女史の軌跡』及び浦野シマ聞き取り調査より。
- 91) 浦野シマ著；うつつなる狂者の慈母の歌と石橋ハヤ女史，看護 Vol.28，No.7，1976年，pp.89-95
- 92) Clifford whittingham Beers, A mind that found itself, (江畑啓介訳，わが魂にあうまで，星和出版，1980年)
- 93) 同前掲書92），p.226
- 94) アドルフ・マイヤー（Adolf Meyer 1866-1950）；スイス生まれ。チューリッヒその他で医学及び精神医学の教育を受けた後，1892年（明治25年）アメリカに移住し，ジョンズ・ホプキンス大学医学部で教授となる。精神病を不適應の結果と見なした。
- 95) ジェームズ（William James 1842-1910年）；アメリカの心理学者，哲学者。1872年，ハーバード大学生理学講師を皮切りに助教授，教授に就任，アメリカではじめての心理学実験室を生理学教室内に設け，89年に心理学教授になった。その実績は実験心理学史上特筆すべき位置を占め，アメリカにおける心理学の創始者の1人である。彼の心理学は内省的な機能心理学であり，また有機体とその生物的環境を重視する点から生物学的といわれる。
- 96) Clifford whittingham Beers, 前掲書92），p.262
- 97) Mary Jane Ward, The Snake Pit (服部達訳，蛇の穴，岡倉書房，1950年)
- 98) 厚生省健康政策局編集；健康政策六法，1986年，p.1015
- 99) 宇都宮事件；栃木県宇都宮市にある私立報徳会宇都宮病院で入院患者の人権蹂躪事件がおきた。この事件で院長の資質が問われ，処罰の対象になった。WHO の顧問であるイギリス，ケンブリッジ，フルボーン病院の院長デービッド・H・クラークは「日本の精神病院には非常に多くの分裂病患者が収容されており，長期入院によって無欲状態に陥っている。」と報告し，日本政府に精神保健活動が不十分であることにたいして真剣に考慮するよう勧告した。
- 100) 前掲書98），p.1754

- 101) 看護行政研究会監修；看護六法，新日本法規，2002年，p.446
- 102) 呉秀三著；癲狂院ノ家族看護法ニ就テ，医事新聞（608号），1902年2月25日付け
- 103) Josephine A. Dolan，前掲書30），p.428
- 104) 同前掲書，p.429
- 105) フロイト（Sigmund Freud 1856-1939）；ウィーン大学で医学を学び，ウィーン病院で精神医学を専攻。無意識を“イド”と“自我”と“超自我”に分割した精神分析理論を大成した。
- 106) ジョン・ワトソン（John Broadus Watson 1878-1958年），アメリカの心理学者，行動心理学の主唱者，今までの心理学が対象としていた意識を放棄し，内観又は内省法を徹底的に拒否した。行動を条件反射によって理解しようとする。
- 107) Josephine A. Dolan，前掲書30），p.384